國學院大學学術情報リポジトリ

愛知県における「誓の御柱」：特集御代替りの歴史と伝統

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 昆野, 伸幸, Konno, Nobuyuki
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000530

愛知県における「誓の御柱」

昆野伸幸

はじめに

昭和三（一九二八）年一一月、昭和天皇の即位礼とそれに関連する大嘗祭などの諸行事が行われた。当時「御大典」「大礼」と称されたこの一一月六～三〇日までの一連の儀式に際し、全国各地で奉祝の催しや記念事業が行われ、記念の絵葉書も多数作成された。大礼時に執行された即位儀礼や大礼にまつわる政治的・社会的問題、国民側の反応などに関しては、様々な分析が蓄積されている。それら先行研究は、昭和大礼が国民統合に果たした役割やその後の警備体制のあり方に及ぼした影響などを指摘する[1]一方、他方では、国民（都市の上層～中層民）が消費と観光の欲望にとらわれ、大礼が日本民族としての輝かしい記憶を形成・共有する場としては十分に機能していなかった可能性を指摘するものもある[2]。いずれにしても、大礼や奉祝事業が国民に及ぼした影響については、安易な一般化は避け、階層性や地域性なども考慮しつつ、具体的に検討していくことが今後も必要である。

このような研究史の現状からすると、愛知県の事例は興味深い。同県は、神奈川県や三重県などと同様に、東京から大礼が

行われる京都に向かう沿道県の一つであり、天皇・皇后の行幸啓のあった県であり、様々な奉祝行事が営まれた。そのなかで注目すべきものとして、知多郡成岩町において運動山と県立知多高等女学校に「誓の御柱」（以下、括弧を略す）が建設され[3]、また西春日井郡西枇杷島町では「御大典紀念 誓之御柱絵葉書」（西枇杷島町青年団）が作成されている。

誓の御柱とは、五角形の台座の上に五面の塔がそびえたつモニュメントであり、塔の各面には慶応四（一八六八）年にだされた五箇条の誓文が一つずつ、また台座の各面には「弥栄」「天晴れ」「あな面しろ」「あな手伸し」「あなさやけおけ」の文言が刻まれている。冒頭の「弥栄」とは、独特な古神道思想を有する東京帝国大学教授筧克彦（明治五～昭和三六〈一八七二～一九六一〉）および主に帝大時代に筧に学び、影響を受けた人々――二荒芳徳、守屋栄夫、瀧本豊之輔、渡邊八郎、石黒英彦ら――が重視した語・概念であり、「万歳」に替わる祝意をあらわす語としても提唱された。また「天晴れ」以下は、アマテラスが天岩戸から出てきた際に神々があげた声を分節化したものであり、『古語拾遺』を出典とする。もともと五箇条の誓文は、天皇が「天地神明」に誓うという形式をもつが、全国各地に建設された誓の御柱は、基本的には筧の古神道思想を背景とするものであり、五箇条の誓文がより直接的に神話的権威、神道的解釈と結びつくかたちで視覚化されたものといえる。

大礼直前には明治節があり、それも制定後、初の明治節（昭和二年一一月三日）が大正天皇の諒闇により奉祝を自粛せざるをえなかったことも作用して、大礼の奉祝事業として、明治天皇を記念する碑の建設が全国各地で相次いだ。そのようななかでも、誓の御柱という形で奉祝の意を示した地域は愛知県と滋賀県以外にはないように見受けられる。誓の御柱自体は、昭和大礼以前に滋賀県にも一基建立されており、昭和三年四月一五日、大礼記念に初参拝団が組織され、三一五名が琵琶湖に浮かぶ多景島の誓の御柱を参拝している[4]が、新たな建設には至らなかった。それに対し、愛知県では少なくとも二基の新設が確認でき、他府県以上に誓の御柱が奉祝にふさわしいものと捉えられていたことがうかがえる。実際、大礼以前に県内では少なくとも五カ所に誓の御柱はすでに建設されている（表1参照）。それではこの誓の御柱は、なぜかくも愛知県と接点が深いのであろうか。

これまで誓の御柱に関しては、大正一五（一九二六）年に滋賀県多景島に建設されたもの、愛知県内のいくつかの誓の御柱が断片的に言及されてきたが[5]、その歴史的意味や愛知県内に多

表１　愛知県内に建設された誓の御柱

建設時期	建設地 （移転前、当時の地名）	建設主体	備考（典拠）
大正11年８月	中島郡大里村奥田	修養団愛知県支部	杉原弥市郎編『大正十一年八月 奉公講習会記念写真帖 於中島郡大里村』修養団愛知県支部、1922年。
大正11年12月	愛知郡猪高村猪高尋常高等小学校	牧野秀	猪高村誌編纂委員会編『猪高村誌』猪高村誌編纂委員会、1959年、75頁。
大正12年５月	海部郡佐織村大野山	佐織村大野山青年会	絵葉書「（大正十二年五月）誓之御柱建設記念（海部郡佐織村大野山）」（筆者所蔵）。伊藤厚史『愛知・名古屋の戦争遺跡』六一書房、2016年、113頁。
大正13年	葉栗郡宮田村	宮田村青年会	「皇太子殿下御成婚記念事業」『愛知教育』434号、1924年２月、43頁。
大正15年４月	海部郡美和村十二所社	森山青年会	伊藤厚史『愛知・名古屋の戦争遺跡』六一書房、2016年、113頁。西田彰一「「誓の御柱」建設運動とその広がりについて」『日本研究』58集、2018年11月、165頁。
昭和３年11月	知多郡成岩町運動山	成岩町男女青年団	「愛知県知多郡成岩町男女青年団建設の『誓の御柱』」『いやさか』13号、1929年３月、６頁。『成岩町史』愛知県知多郡成岩町教育会、1936年、201頁。
昭和４年１月	知多郡成岩町知多高等女学校	知多高等女学校同窓会	『愛知県立半田高等学校誌』愛知県立半田高等学校創立記念事業実行委員会、1980年、177～179頁。
昭和５年11月	知多郡亀崎町白山社	不明	伊藤厚史『愛知・名古屋の戦争遺跡』六一書房、2016年、113～114頁。
不明	名古屋鉄道局教習所	教習所卒業生	瀧本豊之輔『五箇条御誓文大意』東学社、1934年、71頁。伊藤生「教習所の現況」『会誌』37号、名古屋鉄道局教習所同窓会、1936年３月、137頁。
不明	西春日井郡西枇杷島町	西枇杷島町青年団	「御大典紀念誓之御柱絵葉書」西枇杷島町青年団（筆者所蔵）

い理由などは考察されてこなかった。ただし近年、西田彰一氏は各地に建設された誓の御柱について網羅的に調査し、筧克彦の神道思想との関連について詳細に分析している⑥。誓の御柱に関する実証的な研究と筧の思想の地域的広がりの分析はようやく始まった段階といえる。二〇〇〇年以降、筧の思想に対する実証的な検討が進みつつあるが、筧の思想の受容という問題については、「日本体操（やまとばたらき）」（日本神話をモチーフとした、筧考案の体操）の普及を分析した中房敏朗氏の業績⑦と先に挙げた西田氏のものを除けば本格的な研究はまだない。本稿では、このような研究史の現状を踏まえ、愛知県に即して誓の御柱建設の背景を考察することで、特異に見える筧の思想が

なぜ、どのように受容されたのかを解明する一助としたい。

一、筧克彦と修養団

愛知県内における誓の御柱の広がりを論じるうえで、まずは大正初期の時点での愛知県と筧克彦（の思想）との接点について確認しておきたい。そもそも当該期、愛知県知事を務めた松井茂（在任：大正二年三月三日～同八年四月一八日）は「近来古神道の研究が行はれるやうになつたが、これは国体を知るのに大切なことである。（中略）博士〔筧――引用者註、以下同じ〕は文明的の学問をして居られるが、大いに現代の風潮に慨嘆して古神道を研究せられたのである。実に日本の道徳は開闢以来神道と離るべからざるものである[8]」と、筧の古神道思想に理解を示していた。このような県知事の態度が示すように、当時、県政に携わる者の周囲には筧の思想が広がっていた。

例えば、のちに大日本弥栄会会長として誓の御柱建設に取り組む二荒芳徳（明治一九～昭和四二〈一八八六～一九六七〉）は、愛知在勤中（大正三年二月、愛知県属・内務部地方課、同年一二月、内務部社寺兵事課）、大学で学んだ筧の法哲学と岡田式静坐法との間に共通性を感じ、筧の著書を通読し[9]、傾倒していく。そして、ちょうどこの頃、愛知県立農林学校校長の山崎延吉（明治六～昭和二九〈一八七三～一九五四〉）は、生きることに懊悩する同校教師の加藤完治（明治一七～昭和四二〈一八八四～一九六七〉）を見かねて、筧の話を聞かせようと思い[10]、大正三（一九一四）年四月四・五日、同校講堂を会場に筧の「古神道」と題する講話が行われた[11]。加藤は筧の話に感銘し、「何だか日本人として生れ変ったようになった。それから日本人としての本分を受持分担で尽すことに心が決まり、次のような心境になったのである。（改行）敷島の大和心を人問わば　受持分担　一心同体[12]」と回心した。接点は不明ながらも、農村教育家として著名な山崎と筧は面識があったようで、大正初期には既に山崎も筧の思想に影響を受けていたようである。そして同年夏、再び筧は愛知県会議事堂において古神道の大義について講演している[13]。二荒が愛知県を離れた後も、筧の影響の強い守屋栄夫（明治一七～昭和四八〈一八八四～一九七三〉）が理事官兼視学官として愛知県に赴任する（在任：大正五年一月一一日～同六年五月一日）。守屋の愛知在任中、大正六年四月二九日、名古屋で開催された五県連合神職会で筧が講演している[14]。松井茂知事の理解も、おそらくは二荒・守屋両者による働きかけの成果であろう。

このように県知事をはじめ、属、理事官、県立学校校長・教師が筧神道に理解があることから、大正初期の愛知県において、官側の働きかけから、いわば上から筧の思想を広める下地はできていた。しかし、これだけであれば、筧の思想を背景にもつ誓の御柱が愛知県で独自な広がりを見せた要因の説明としては、不十分である。誓の御柱の普及を支えた、いわば下からの要因とは何なのか。結論を先取りすれば、それは修養団の運動である。

筧克彦の思想はときに反発を受けながらも、単に知識人の間のみにとどまらず、広く社会の各層に普及していった。その際の回路としては少年団や農本主義の学校などが挙げられるが、本稿では修養団に注目したい。修養団とは、明治三九（一九〇六）年二月一一日、青山師範学校生徒蓮沼門三によって設立された、「流汗鍛錬、同胞相愛」をスローガンに、個人の人格の向上を通して社会全体の改良を図ろうとする社会教化団体である。筧は修養団が設立された初期から賛助員を務めており、とくに大正初期、修養団の活動を様々な面で支援している。[15] 例えば、修養団が、大正四年に、知育偏重の既存の学校教育を批判し、講師と参加者が合宿して寝食をともにすることで、お互いの人格のふれあいを通じた人格向上を目指す天幕講習会を初めて企画した際、参加・協力を打診された筧は、多忙から参加は見合わせるものの、思想問題への対策として農村青年の思想の健全化を重視する立場から「地方の不健全なる思想を打破するは我等の責務なり」と、企画に賛成し、修養団の事業を各地で紹介することを約束している。[16]

また修養団の記念の会において講演を行うこともしばしばであった。大正四年一〇月三日、修養団のある記念会で、筧は古神道について講演している。その際「神ながらの存在即ち吾等が内部にあるものにどつしりと安らかに腰をおろすことをしなければ宗教や技術も活きて働かぬ、（中略）大和民族は学問技術よりも、寧ろ神ながらの存在を捕へて活きて来たと言ふべきである。学問や技術に於ては寧ろ余りに支那や欧米に心酔したやうに思へる、以後も吾等は此神ながらの存在に依つて活きて行かねばならぬ[17]」と、筧は、宗教や技術という作為的・後天的なものにとらわれず、自らの内部に先天的に有する「神ながらの存在」を認識することの重要性を説く。彼によれば、「此の禊が即ち洗面であつて伊邪那岐神は吾々を通じて此の宇宙に雄大なるものを実現せらるゝのである。（中略）吾々が小さな五寸四方にも足らぬ顔を洗つて居ると思ふとそれは間違つてゐる小さな顔ではない日本人全体の顔である、世界の顔である[18]」と、

朝起きて、顔を洗うことなど日常生活のすべては自己に内在する「神ながらの存在」を媒介にした神の現われであり、換言すれば神は私たちの営為を通じて雄大な神意を実現する、そのような神人合一を可能とする私たち一人ひとりは、孤立したものではなく、本来一心同体であり「日本人全体」「世界」そのものを体現する存在とされる。

筧の古神道論は、既存の宗教によっては安心できない者、様々な理由から学問や技術の習熟が十分にできない者に、取るに足りない日常生活が実は神聖な営みを分担したものであり、平凡と思われる自分が「日本人全体」「世界」と一体であるのだと気付かせ、自己に生きる意味を与える教えとなっている。加藤完治が筧の話に感銘したのもこのためだろう。実際、筧の講演を聞いた修養団員は「筧博士の神ながらの存在には人々皆新しい自己を得て已(ママ)れを尊重すべき観念を得た[19]」と共感している。

さらに筧は、大正五年二月一一日、修養団創立一〇周年記念会でも講演を行っている。その内容は、個人の生命は親の生命を継承・発展させ、「我々は、親のよい所は益之を発揮し、一方に於いては他人と交際して他から教を受けて、他の美しい精神を已(ママ)に移して、已(ママ)の特色は愈々之を発揚して行かねばならぬ[20]」としたうえで、「大生命」としてのアメノミナカヌシ、「産霊」、イザナギ・イザナミの「伊珊那」という意気込み、和魂と荒魂、三種の神器という難解な内容に及ぶ。主意としては、日本人は「普遍的の生命」＝「大生命」＝アメノミナカヌシの現われであり、「一心同体」で、神を内在している。そのため「修養と云ふも、自分勝手に之をしてゐるのではない、実に神の「弥栄」の現はれに外ならない。神の要求する自己である、説明すれば我々の働きは迷ひではないに、迷ひに発してゐるのではない、神聖なる神の命令である。（改行）故に此の働きの神聖なることを自覚して、愈々之をして美しくしなければならぬ[21]」。

筧によれば、個人が修養し、自己をよりよいものへと高めようとするのは、「弥栄」を求める内なる神の意思に従ったものである。我々は迷い、煩悶から出発するのではなく、内在する神の意思・命令に従って生きている。その点で我々の生活・人生は神聖なのであり、その意味を自覚して、ますます自己の生活をよりよいものにしていく必要がある。

この筧の講演に対し、ある修養団員は「博士の趣旨は恐らく些々たる事柄を諸君に教へたいのではなかつたらうと思ひます。（中略）理窟から考へて行つたならば、了解しにくゝとも、方面をかへて行つたら、博士の一場の講演を聞いた私たちの心が、何者かに触れ得る筈であらうと思ひます。殊に博士と縁故

深き修養団の諸君に於ては、是非何者かを掴まずには居られなかつたらうと思ひます[22]」とフォローしている。

修養団側は、筧の小冊子『一心同体』について「博士の言論の凡てに賛同する」と評し、「国民道徳の作興に補益する」「修養書」と位置付けている[23]ように、筧の思想（古神道）を必ずしも神道という特定の宗教として受けとめたわけではなかった。むしろ一見神秘的に見える筧の古神道論は、修養団の志向――日々の労働を通じて修養を重ねることで（流汗鍛錬）、人格の向上を図る、また自己を尊重し、お互いの人格を認め合うことで（同胞相愛）、不断に自己を更新し、その延長・拡大を通して社会とつながり、社会の改良を目指す――と重なるところが多い。自己の尊重・拡充につながる（と受けとめられた）筧の古神道論は、思想性や体系性に欠けるきらいのある修養団にとって、自らの営みに対し、ある種の思想的な裏付けを与えるものとして重宝がられることになったと考えられる。

大正初期、「博士と縁故深き修養団の諸君」と言われるほど、筧は修養団と密接な関係を築いていた。この関係を踏まえれば、筧の影響の強い者が修養団の活動に賛同・協力するようになるのはある意味当然ともいえる。大正五年二月、修養団主幹の蓮沼門三は静岡県の地方遊説に出かけるが、その際「年少気鋭の理事官」二荒芳徳と会談し、意気投合している[24]。この頃の二荒は、現代の教育が「直接人の感情に触れて人を化せんとする」ことのない理屈教育に陥っている弊害を指摘し、「神社崇敬の実修」を通じた「信念の涵養」を提案していた[25]ことを踏まえれば、二荒と蓮沼の問題意識は極めて似通っていることが分かる。二荒が大正四年四月に愛知県から静岡県に異動した頃、既に静岡県内には複数の修養団支部が設立され、昔から活発な活動を重ねており[26]、二荒の尽力もあってか、大正五年八月、富士山麓白糸の滝（静岡県白糸村）において第二回天幕講習会が開催される。課外講師として参加した二荒は、講習生を発奮させるとともに自身も大きな感銘を受けた[27]。

また「修養団が朝鮮内に発芽したのは、大正九年前後である、当時団員は僅少にて活動上苦心惨膽（ママ）の折柄、総督府庶務部長守屋栄夫氏は自ら進んで修養団の運動を援助せらるゝ事となり」、守屋は修養団朝鮮聯合会本部顧問を務める[28]。大正末期、筧と二荒も修養団評議員になっており、筧学派と修養団は蜜月関係にあったといっても過言ではない。

そして二荒、守屋の場合とは逆に、修養団の運動に熱心に携わる者のうちから、筧の思想に傾倒する者が現われるようになる。次節では、愛知県内に広まった修養団の運動が、筧の古神

道論を受容し、誓の御柱を積極的に紹介・建設していくさまを分析しよう。

二、愛知県における誓の御柱建設

まずは誓の御柱が発案される背景を確認したい。のちに誓の御柱建設を主な事業とする弥栄会は、誓の御柱の発案元を、筧と彼の思想に共鳴する人々からなるゆるやかな同人組織であり、「惟神の皇国思想の研究を主たる目的とする一笑会」と捉えている。[29]ただし、個人のレベルでいえば当時から「『誓の御柱』は水上七郎氏の創案」[30]と見なされたように、誓の御柱建設事業は、筧の思想に心酔していた水上七郎（明治一四～大正一五〈一八八一～一九二六〉）が中心となって発案したことは間違いないだろう。

そもそも筧自身は、五箇条の誓文について、以下のように解釈していた。

> 先つ広く会議を興し万機公論に決し、官武一途となり上下の人人手を引き手を引かれて　天照大神の和魂を以て国の内外を美化し世界を神国化せんとする御方針である。斯く上下各々其の私を超越して創設作用を行ふに当つては、決して各自の随神の本性特性を抑圧することなく、各人の有する事実中より自発する特色、要求道理及び[ママ]自由行動を思ふ存分に是認することを主義とし、世間に於ける陋習と認むべきものを転化して天地の公道を輝かさしめ、此の公道を基として世界の有ゆる智識を採用することを旨とし給はれたのであります。[31]

「天照大神の和魂」「創設作用」など、筧独特の解釈を伴う要素をひとまず棚上げすれば、各自が「随神の本性」を自発的に発揮することで、陋習を改正し、「天地の公道」に基づいて国内外を改良しようとする、という意味合いで、修養団の志向に近い。

この筧の理解を前提に、水上は「蓋し国民の精神に感化を及ぼし、之れに実行力を与ふるものは、深遠、巧妙なる理論よりも、説明よりも、簡単、明瞭なる、しかも其の背後には無限の真理を蔵して居る形象、文句等を度々瞻仰し、又奉誦せしむるにあるのであります[32]」との見地から、理論（独特、難解な筧の古神道論そのもの）ではなく、形象、文句、奉誦の機能に注目する。そのため彼は「単純なる紀念碑」、すなわち単なる過去

の顕彰ではなく「将来に向ての皇国精神鍛錬の目標」[33]、いわば「具体化されたる象徴」[34]として、誓の御柱という具体的な塔を創案し、国民みなが目指すべき共通の修錬の目標を客観的に示すことで、国民に「一心同体」を実感させることを期待した。この意味で、誓の御柱も「日本体操」や「弥栄」三唱といった実践と同様に、人々に強い一体感を喚起するための形式と捉えることができる。

ただし、水上が誓の御柱を発案し、五箇条の誓文の意義を強調した背景には、滋賀県警察部長（在任：大正九年九月～同一二年一〇月）という当時の彼の立場も関係していたと推測される。すなわち、五箇条の誓文は「大正デモクラシー」側に活用される[35]以前から、融和運動において参照される機会のほうが多かった。五箇条の誓文にある「旧来ノ陋習」が、被差別部落へのいわれなき差別として解釈され、「明治天皇の恩恵とそれへの感謝・報恩を正面に出した融和運動」[36]として、夙に大和同志会（大正元年八月設立）、帝国公道会（大正三年六月設立）が成立していた。とくに全国水平社設立（大正一一年三月）以後は、それとの対抗上、全国で融和運動は盛んになるが、なかでも水平社委員長の南梅吉の出身地である滋賀県は敏感に反応し、水上は警察部長として県内の治安維持のため部落対策に取り組んでいた[37]。このような展開となる過程において、大正一〇（一九二一）年一月、滋賀県で水上が、一体感の喚起を目指す誓の御柱建設計画を発表し、建設運動を主導するのは、おそらく偶然ではないだろう。

建設計画の発表にあわせて、誓の御柱の模型（一笑会作図、八坂会作成）が作られ[38]、水上は『誓之御柱』（奉公会、一九二一年）を刊行し、建設の目的、意義の宣伝に努めた。

それでは誓の御柱は、どのような経路で愛知県内に広まっていったのだろうか。

㈠　修養団を通じた建設

そもそも愛知県における修養団の運動は、明治四二（一九〇九）年に設立された西加茂郡支部を嚆矢とするが、本格化するのは、大正八年五月四日、碧海郡安城町の愛知県立農林学校内に愛知県支部が設立されてからである[39]（のちに県支部は、幹事長の杉原弥一郎宅へ、さらに向上社に移る）。愛知県支部の支部長を務めたのが、同校校長山崎延吉である。彼は、農村社会の疲弊・沈滞という現実に対し、自発性・主体性に支えられた自己献身的な農民によって、新しい農村を作ろうとしていた[40]。かかる問題意識をもつ彼は、支部長就任以前から修養

団の活動に理解を示し、地域社会のリーダーとなりうる有為な青年に修養団入団を勧めていた。[41]

修養団愛知県支部（以下、県支部と略記）は、早い段階で誓の御柱の模型を入手したようであり、模型を写した絵葉書が作成されている。絵葉書には「誓ノ御柱（修養団愛知県支部）」とのキャプションのもと写真が掲載され、「誓ノ御柱ハ右御誓文〔五箇条の誓文〕ヲ奉録シタ記念塔デアリマス吾々ハ此記念塔ニヨリ御聖旨ヲ日夜奉体シテ皇国ノ弥栄ヲ計リマセウ」[42]と、その意義を説明した。滋賀県内では誓の御柱建設事業に対して批判の声も挙がっていたなかで、県支部ではとくに問題なく受容されたことに留意する必要がある。支部長の山崎が「先生〔筧〕に面談すれば、何時でも浄化さるゝ思がする。今更ながら人格の力の偉大さを痛感し、其の修養に非常の努力をせねばならぬ事を、しみ〴〵思ふ」[43]と、人格修養の観点から筧を敬慕しているとはいえ、誓の御柱に対する評価は、修養団そのものの性格を度外視して考えることはできない。

そもそも水上によれば、誓の御柱は理論ではなく感情に訴える「象徴」として機能するものであったが、理論（その源たる知）よりも、感情、労働、人格的ふれあいなどを重視することで知育偏重の学校教育を超えようとした修養団の志向と合致していた。また御柱の台座正面には「弥栄」と刻印されているが、先述の通り、筧によれば、修養とは「弥栄」を求める神の意思の現われである。人格修養（「皇国精神鍛錬」）の目標を目に見える形で現わし、自身の修養と他者の修養とが到達点を同じくするものであることを示すことで、お互いが一体感を抱き、共同性を確認しあう構図が見てとれる。であれば、誓の御柱は、初対面の者を含む大勢が共同生活を送りつつ、修養を積むことを図る講習会において最も効果的に機能するだろう。

県支部では、大正九年以降、毎年夏に講習会を主催しているが、誓の御柱建設事業の発表以前に行われた初の講習会（洗心講習会）はともかく、実際に二回目の講習会（自治講習会）から誓の御柱は登場する。自治講習会は、大正一〇年七月二七日から三〇日にかけて南設楽郡長篠村を会場に講習生九三名の参加のもと行われたが、この際、図書室に充てられた場所に誓の御柱の模型が展示された。これがこの模型の公共の場での初のお披露目かと思われる。なお、この講習会においては、『大阪毎日新聞』記者の樅山真が講師の一人として「誓之御柱」と題して講演もしている。[44]

そして、この自治講習会の翌月、大正一〇年八月、県支部は、熱田神宮（愛知県）から彌彦神社（新潟県）まで横断する「洗

心行軍」を実施し、一三七名の申込者の中から選ばれた一八名（代表者：杉原弥一郎）が参加した。出発の前日、八月一〇日には、水上七郎を講師とする出発祝賀一夜講習会が開催されている。[45]「誓ノ御柱（修養団愛知県支部）」のキャプションの付された誓の御柱の模型の写真をのせる絵葉書（筆者所蔵）には、「修養団愛知支部主催　本州横断洗心行軍　大正十年八月発行」のスタンプが押されているが、この絵葉書はあるいはこの一夜講習会の際に配布されたものかもしれない。

さらに、三回目の講習会（奉公講習会）は、大正一一年八月二二～二八日、中島郡大里村にて一九二名の講習生が参加して開催されたが、この講習会において、誓の御柱が建設されている。管見の限り、実際の建設物としては、これが初めてのものである。ただし、このときの誓の御柱は、「弥栄」等の刻印は認められるものの模型の姿とは少々異なる。なおこの講習会では、講師（正科）として筧克彦が「思想問題」を、講師（専科）として亀山半眠（『名古屋新聞』記者、愛知県支部幹事）が「誓之御柱」を講じ、さらに講師（科外）として水上七郎も参加している。講習会は、誓の御柱の前で参加者一同が「弥栄」を唱えることによって幕を閉じている。[46]

支部長の山崎自身が奉公講習会について「特筆すべきは、誓の御柱が建てられた」[47]ことと述べるように、この講習会は、県支部の想定する「奉公」の観念とは、誓の御柱に象徴される「皇国精神」に他ならないことを示し、筧の思想および誓の御柱の意義を広めるうえで大きな契機となった。すなわち、この講習会に参加し、感化された参加者は、県内各地に誓の御柱を建設していくこととなる。まず大正一一年二月、修養団愛知郡支部を設立した[48]牧野秀（明治二〇～昭和三〇〈一八八七～一九五五〉）は、県支部幹事、講習会理事として奉公講習会に参加した後、同年一二月、愛知郡猪高村猪高尋常高等小学校校長に在任中、学校敷地に誓の御柱を建設している。[49]彼は、蓮沼門三から熱烈な勧誘を受け、翌年、校長を辞し、修養団本部に入り、戦前・戦後を通じて運動の中心となって活躍する。彼は「実に努力の連続が人生であり生命である」、「小作人は地主を労働者は資本家を下僚は上司を各憎悪各反目することにのみ汲々として自己の職分を忘れ忠実に働くことが出来ないと云ふことになつてゐるのが現時の状態なのであります」[50]と、いかにも修養団らしい主張をするが、この不断の努力と「自己の職分」を自覚した労働という主張に筧の思想――「弥栄」「受持分担」「一心同体」――を見てとっても何ら不自然ではない。

また奉公講習会には、海部郡佐織村から、佐織尋常高等小学

校訓導・内藤又右衛門ら三名が参加している。内藤（明治二七～？〈一八九四～？〉）は、自治講習会、「洗心行軍」にも参加した非常に熱心な団員であり、奉公講習会には県支部幹事、講習会理事として参加していた。この点、牧野秀と同じ立場であり、おそらくは内藤が中心となったのかと思われるが、大正一二年五月、海部郡佐織村大野山に誓の御柱が建設された。[51]

この頃、県支部は向上社（山崎延吉主宰）に移っていたが、同社が発行する雑誌『清明心』（「本誌賛助員」の一人は筧克彦）では、「忠魂碑のほとり、幼な子の寄り集ふ校庭のかたはらに木材でよし、石材なほよしである。（改行）修養団員の読者結束して運動を起したならば、かならずや、見事なものが除幕される。確かに〔大正一二年〕一一月には竣工する、努めよ！」[52]と、年内に予定された皇太子成婚（実際には関東大震災の発生によって、大正一三年一月に延期）の記念事業として誓の御柱を建設することが呼びかけられている。これにこたえてか、大正一三年、成婚記念に宮田村青年会によって葉栗郡宮田村に誓の御柱が建設され、除幕式が挙行されたようである。[53]

さらに大正一五年四月、森山青年会によって海部郡美和村十二所社に誓の御柱が建設されているが、[54]これについては詳しい事情は不明である。ただ美和村森山から奉公講習会に参加した者が二名いることは確認できる。

ところで、大正後期、修養団運動は地方農村のみならず、都市労働者をも対象に拡大していった。そのことを反映するように、奉公講習会には名古屋車両区（「名古屋機関庫」）から一四名もの多数が参加している。そして、この一四名のうち四名が、昭和四年一一月までに名古屋鉄道局教習所[55]（一人は金沢分教所のみ）を修了している。[56]この四名のうち三名は、名古屋の専修部機関手科の八期生（大正一四年一一月五日入所～同一五年二月二八日修了）、一三期生（昭和二年七月四日～一〇月三〇日）、一六期生（昭和三年七月九日～一一月八日）であり、ほぼ同じ頃学んでいる。同窓会誌に「卒業生の記念基金で出来た五カ条の御誓文を刻んだ記念塔が〔名古屋鉄道局教習所の〕本館前左手に建立してある」[57]とあり、おそらくは奉公講習会に参加したのち名古屋鉄道局教習所を修了した三人が中心となって、昭和初期頃、大礼記念に誓の御柱を建設したと推測される。名古屋鉄道局教習所には、修養団理事がしばしば講話に訪れており、あるいは牧野秀の働きかけもあったのかもしれない。[58]

修養団運動の拡大に便乗するかたちで、誓の御柱も都市へと進出していった。ただし、これまでの順調な展開は、大正末には頓挫することになる。水上七郎が三重県内務部長に異動して

以後も、山崎延吉と水上との交際は続いたようであるが[59]、『清明心』誌上において誓の御柱関係の記事は、管見の限り、水上七郎「誓之御柱」（『清明心』二九号、一九二四年八月）が最後である。これは、同誌の編集を担当する県支部幹事長の稲垣稔が、修養団のあり方（本部による指導の強要、農村本位の立場からの転換）に反発し、距離を置き、全村学校と呼ばれるより農民本位の講習会の実施に傾注していくようになることの反映であろう。その結果、愛知県内において修養団の活動を通じて、誓の御柱の意義を宣伝する機会が減少するのである。

㈡　弥栄会を通じた建設

さて、愛知県内における誓の御柱建設がまだ順調だった頃、水上はより大規模な誓の御柱を琵琶湖に浮かぶ多景島に建設しようと活動していた。その建設の経緯、問題の発生などは西田彰一氏が詳細に解明している。紆余曲折の末に多景島に誓の御柱は建設され、さらに水上は「全国到る所に、恰も忠魂碑のあるが如く」[61]全国各地に誓の御柱が建設されることを望んでいたが、多景島での誓の御柱除幕式（大正一五年四月一日）からほどなく、八月に死去してしまう。水上の宿願を果たすために、昭和二（一九二七）年四月二九日、誓の御柱建設を重要な事業とする弥栄会（昭和四年、大日本弥栄会に改称）が発会し、二荒芳徳が会長に就任する[62]。

大日本弥栄会が協力し、各地元の思惑も作用するなかで、誓の御柱は秋田県男鹿市寒風山（昭和五年）、山形県自治講習所大高根道場（昭和七年）、三重県四日市市諏訪公園（昭和九年）など様々な地域に建てられていく。二荒らは、滋賀県弥栄会、三重県弥栄会、知多弥栄会、秋田弥栄会など[63]、主に誓の御柱が建設された地域に弥栄会を設立し、この地方支部的な弥栄会を基盤に、筧の思想を地域に宣伝・普及することとなる。

そして、愛知県知多郡成岩町において誓の御柱建設の中心を担ったのが、知多高等女学校校長中村正元（明治一八～？〈一八八五～？〉）である。彼は校長として赴任すると、宇部尋常高等小学校訓導田邊元次を山口県から呼び寄せ、大正一三年九月、知多高等女学校に赴任した田邊を、同年冬、筧の考案した独特の体操である「皇国運動（やまとぼたんうんどう）」の講習に派遣し、大正一四年一月から積極的に生徒に「皇国運動」を実施させる。さらに「成岩町青年団にも団長の希望により講師として本校教師を派遣した」ように、成岩町に筧の思想・実践を広めていった[64]。この青年団は「これ〔誓の御柱〕を中心として現今世相の矛盾を清明にし反対観念を和調し建国の大精神を体得すべく青年男女

の活動を促し兼ねて地方教化の進展に貢献し度いとの考から」、大礼の奉祝記念事業として成岩町運動山の成岩公園に誓の御柱を建設するに至る[65]（昭和三年一一月一七日、除幕式）。中村の指導の結果であろう。

さらに中村の勤める知多高等女学校の玄関前に、大礼の奉祝事業として誓の御柱が建設される[66]。このことについて、彼は「学校当局の指揮命令によらず、同窓会員自発的に建議成立した[67]」と誇るが、実際には彼が校長の兼ねる同窓会会長として、転任間際に建設を主導したのだと判断できる。昭和四年一月三一日、除幕式が挙行される時には、彼はすでに栃木県氏家高等女学校校長へと転出していたものの、中村前校長の方針は、その後任の五十里秋三校長にも踏襲されたようで、五十里は知多弥栄会会長に就任している。

中村の置き土産は、「バラ色の光さすあした、四百余名の生徒が心を合せて皇国運動をし、日毎々々に弥栄の精神を養つてゐます。清らかな朝の空気を思ふ存分に吸つて、朗かに「いやさか―」を称へる時のすが〳〵しい心持は、それこそ神の御心其の儘である。私達は常に此の心を以て事に当り、学徳の修養に努めてゐます。玄関前に建てられた「誓の御柱」も此の心の象徴である[68]」という感想を在校生に書かせる程度には、意義を広めていた。また「本校玄関の正面に厳然とそびえる、皇国の大精神を象徴した誓ひの御柱を仰いで、絶えざる不断の努力と動かざる信念を養ひつゝ、朝な〳〵の皇国運動に健やかに豊かな身心をきたへ、他校に誇る弥栄の精神を奉じて、明け暮れ感謝の念に充ちつゝ、おのがじゝその本分にいそしむと聞く[69]」と卒業生にも周知のものとなっていく。

ただし、同窓会誌の内容を確認する限り、五十里の転任（昭和六年三月）からしばらく経つ頃には、誓の御柱の存在感も影を潜めたようである。

おわりに

以上、本稿では、誓の御柱の思想的背景である筧克彦の古神道論と修養団の志向との重なりを確認したうえで、愛知県における誓の御柱の広がりについて基礎的事実を明らかにした。先行研究では看過されてきたが、県内における建設の過程には、①修養団運動を通じたもの、②大日本弥栄会によるものといった二つのルートがあった。もともと県内においては「上から」筧の思想を広める下地が十分にあったところに、修養団運動という「下から」の要素が組み合わされることで、誓の御柱は県

内に続々と建設されていった。ところが、県支部を担う山崎延吉や稲垣稔が、修養団の講習会よりも自ら独自に企画する全村学校のほうを重視しはじめるにつれて、講習会や『清明心』などが誓の御柱を紹介・宣伝することは減っていった。その結果、大正末には①のルートはやや衰え、昭和期に②が台頭してくる。大礼奉祝事業として成岩町に建設された誓の御柱は、みなほぼ中村正元の主導によるもので、「下から」の契機をもたないものにとどまった。

①の失速、②の台頭が生じた時期は、ちょうど誓の御柱を発案した水上七郎の死期とも重なる。彼の死後、大日本弥栄会は、①のルートで建設された誓の御柱の存在を忘却・隠蔽し、彼の顕彰の意図もあってか、彼が主導して多景島に建設した巨大な誓の御柱を初めてのものと位置付けていく。ただし、誓の御柱は、昭和九（一九三四）年四月、三重県四日市市に建設されて以降、新たに建設された記録がない。同年、大日本弥栄会理事長の瀧本豊之輔は「御誓文は融和事業によりてのみ反省せられて居る」[70]と述べ、五箇条の誓文の意義が融和運動をこえて広がることのない現状を嘆いているように、この頃には大日本弥栄会の事業は完全に行き詰まっていた。このような停滞状況を打破すべく、会長の二荒は「八紘一宇」論を展開していくのである。

註

（1）菊池克美「一九二八年の儀式と「国民」――即位式と奉祝行事」『歴史評論』三五八号、一九八〇年二月、中島三千男・金山浩・小島健一・丸山由美子「近代天皇制国家と祝祭――一九二八年（昭和三年）の「大礼」と神奈川県民」（神奈川大学人文学研究所編『日本文化――その自覚のための試論』神奈川新聞社出版局、一九八五年）、西秀成・荻野富士夫・藤野豊『昭和大礼記録資料 解説』不二出版、一九九〇年、小山亮「一九二八年「昭和大礼」と写真報道――大礼使による撮影規定とその運用を手がかりに」『歴史評論』七六二号、二〇一三年一〇月、戸田文明「昭和大礼と京都府警備」『四天王寺大学紀要』六一号、二〇一六年三月、など。

（2）右田裕規「祝祭と消費――大正・昭和初期の〈都市的〉な祝祭体験」『社会学評論』六三巻二号、二〇一二年九月、同「大正・昭和初期の祝祭記念商品の都市購買者像」『史学雑誌』一二六編九号、二〇一七年九月、参照。

（3）愛知県編『昭和大礼愛知県記念録』愛知県、一九二九年、一一一〇頁、五十里秋三「誓之御柱建設工事経過報告」『知多』一五号、一九二九年一一月、一〇七頁。

（4）「滋賀弥栄会（弥栄会滋賀支部）沿革」『いやさか』一三号、一九二九年三月、七頁。

（5）阿部安成「多景島の「誓の御柱」」『しがだい』一二号、二〇〇二年七月、筒井正夫『近江骨董紀行――城下町彦根から中山道・琵琶湖へ』新評論、二〇〇七年、『新修 彦根市史 第3巻 通史編近代』彦根市、二〇〇九年、伊藤厚史『愛知・名古屋の戦争遺跡』六一書房、二〇一六年、など。

（6）西田彰一「「誓の御柱」建設運動とその広がりについて」『日本研究』五八集、二〇一八年一一月。

(7) 中房敏朗「1920年代から1930年代における「日本体操」の展開過程について：国民高等学校の創始から満州開拓移民の展開に至る過程に着目して」『体育学研究』六一巻一号、二〇一六年。
(8) 松井茂氏講演「我が国体と家族主義に就いて」『智多』五号、一九一七年一二月、九頁。
(9) 二荒芳徳「静座法創始者岡田虎二郎氏の急死について」『奉公』二一四号、一九二〇年一一月、五頁。
(10) 山崎延吉・加藤完治ほか「朝鮮農事座談会」『弥栄』七五号、一九二八年八月、三九～四〇頁。
(11) 「安城月報（三、四月分）」『愛知県農会報』一九一号、一九一四年五月、五〇頁。
(12) 加藤完治「自叙伝」（『加藤完治全集』一巻、加藤完治全集刊行会事務局、一九六七年）二〇九頁。
(13) 二荒芳徳「知多に於ける御柱除幕式に列して」『いやさか』一三号、一九二九年三月、四頁。
(14) 守屋孝彦『守屋栄夫日記』私家版、二〇〇五年、三二頁。
(15) 筧の初期論文を分析した西田彰一氏によると、一九〇〇年代の筧は、自我の自由を強く希求し、自我を拡大していくことで社会や国家に貢献できると考えていた（西田彰一「一九〇〇年代における筧克彦の思想」『日本研究』五三集、二〇一六年六月）。筧が修養団を支援したのも、このような共通の志向があったためであろう。
(16) 閑山生「感激片語」『向上』九巻八号、一九一五年八月、五六～五七頁。
(17) 筧克彦「雄大なる古神道と我国民の日常生活」『向上』九巻一一号、一九一五年一一月、二四頁。
(18) 同右、二五頁。
(19) 「血湧き肉躍つて談笑深更に及ぶ　本部及第二向上舎記念会記事」『向上』九巻一一号、一九一五年一一月、五〇頁。
(20) 筧克彦「大和民族の生命観」『向上』一〇巻三号、一九一六年三月、三五頁。
(21) 同右、三八頁。
(22) 楫城処士「筧博士の講演に就て」『向上』一〇巻三号、一九一六年三月、六四～六五頁。
(23) 松本風外「修養書　其十三　一心同体」『向上』七巻一一号、一九一三年一一月、五〇頁。
(24) 「団報」『向上』一〇巻三号、一九一六年三月、一二二頁。
(25) 二荒芳徳「天照皇大神及其他の神祇を小学校に奉斎せよ」『聖訓』一巻四号、一九一六年四月、六頁。
(26) 修養団運動八十年史編纂委員会編『修養団運動八十年史　運動の展開』修養団、一九八五年、一一八～一一九頁。
(27) 二荒芳徳「一匙の名薬を与へよ」『向上』一〇巻一〇号、一九一六年一〇月、二六頁。
(28) 「修養団に就て」（手塚藤郎『荒熊ノ更生』修養団朝鮮聯合会本部、一九二四年）九、一〇頁。
(29) 無署名「弥栄会会誌」『維新』一巻一号、一九二七年五月、頁数なし。
(30) 鞍智芳章「小序」（水上七郎『誓之御柱』奉公会、一九二一年六月〈増補第二版〉）頁数なし。
(31) 筧克彦『御即位礼勅語と国民の覚悟』清水書店、一九一六年、八六～八七頁。
(32) 水上七郎『誓之御柱』奉公会、一九二一年六月（増補第二版）、一八頁。
(33) 同右、四三頁。
(34) 同右、一七頁。
(35) 吉野作造「憲政の本義を説いて其有終の美を済すの途を論ず」（一九一六年一月）『吉野作造選集』二、岩波書店、一九九六年、四七頁、和辻哲郎「思想の対峙」（一九一八年一月一六日）『和辻哲郎全集』

二二、岩波書店、一九九一年、一五頁、長谷川如是閑「「大阪朝日」から「我等」へ」（一九一九年二月）『長谷川如是閑選集』一巻、栗田出版会、一九六九年、三五六頁など。

(36) 八箇亮仁「大逆事件後の融和政策」（秋定嘉和・朝治武編『近代日本と水平社』解放出版社、二〇〇二年）八六頁。

(37) 「部落改善の協議／知事以下の県官等と／一堂に会した代表者百余人」『大阪毎日新聞京都附録』一九二二年五月二一日（野洲町部落史編さん委員会・京都部落史研究所編『野洲の部落史』野洲町、二〇〇〇年、五五六頁）。

(38) 山中保三「謹告」（水上七郎『誓之御柱』）頁数なし。

(39) 岡田洋司『大正デモクラシー下の〝地域振興〟――愛知県碧海郡における非政治・社会運動的改革構想の展開』不二出版、一九九九年、二三八～二三九頁。

(40) 岡田洋司『農本主義者山崎延吉――〝皇国〟と地域振興』未知谷、二〇一〇年。

(41) 岩瀬和市『汗堂回想録』私家版、一九七五年、二三頁。

(42) 絵葉書「五箇条ノ御誓文」（筆者所蔵）。

(43) 我農生「旅行漫録（十）」『清明心』四四号、一九二五年一一月、一二頁。

(44) 本稿における自治講習会関係の記述は、すべて杉原弥市郎編『大正十年七月 愛知県中堅青年自治講習会記念写真帖 於南設楽郡長篠村』に依拠している。

(45) 「修養団愛知県支部の経過」『清明心』一九号、一九二三年九月、五頁。

(46) 本稿における奉公講習会関係の記述は、すべて杉原弥市郎編『大正十一年八月 奉公講習会記念写真帖 於中島郡大里村』（修養団愛知県支部、一九二二年）に依拠している。

(47) 山崎生「福島県安達郡新殿村の剛健講習会に出席して」『清明心』二六号、一九二四年五月、六頁。

(48) 蓮沼門三「弔辞」（三宅精一編『故牧野秀先生追想録』修養団、一九五六年）一二頁。

(49) 猪高村誌編纂委員会編『猪高村誌』猪高村誌編纂委員会、一九五九年、七五頁。

(50) 以上、牧野秀「時局重大国民奮起の秋」『日本警察新聞』六〇一号、一九二四年四月一〇日、六頁。

(51) 絵葉書「（大正十二年五月）誓之御柱建設記念（海部郡佐織村大野山）」（筆者所蔵）、伊藤厚史『愛知・名古屋の戦争遺跡』一一三頁。

(52) 稲垣稔「永遠の誇り」『清明心』一六号、一九二三年六月、一二～一三頁。

(53) 「皇太子殿下御成婚記念事業」『愛知教育』四三四号、一九二四年二月、四三頁。

(54) 西田彰一「「誓の御柱」建設運動とその広がりについて」前掲誌、一六五頁参照。

(55) 大正一一年に鉄道省教習所（専門学校に相当する普通部と、大学に相当する高等部）が設置されたことに伴い、これまでの鉄道管理局教習所が鉄道局教習所に改められ、鉄道局ごとに札幌、仙台、東京、名古屋、大阪、門司の六カ所に設置された。鉄道局教習所は、修業年限三年の普通部（中学校に相当）と修業期間四～八カ月ほどの専修部からなる職員養成のための教育・研修機関である（三上敦史「鉄道教習所の教育史2――鉄道省による総合教育体系の展開」〈吉田文・広田照幸編『職業と選抜の歴史社会学――国鉄と社会諸階層』世織書房、二〇〇四年〉参照）。

(56) 『昭和四年十一月十五日現在 会員名簿』名古屋鉄道局教習所同窓会、八三頁、八四頁、八五頁、八七頁。

(57) 伊藤生「教習所の現況」『会誌』三七号、名古屋鉄道局教習所同窓会、

一九三六年三月、一三七頁。

(58)『会誌』四〇号（名古屋鉄道局教習所同窓会、一九三七年九月）一一七頁には、誓の御柱を背景にした牧野らの写真が掲載されている。

(59) 山崎延吉「旅行漫録（一）」『清明心』三五号、一九二五年二月、一一頁。大正一五年八月二二日、山崎は死去した水上の遺族を訪ねている（我農生山崎延吉「南船北馬旅行漫録」『清明心』五五号、一九二六年一〇月、一六～一七頁）。

(60) 岡田洋司『農村青年＝稲垣稔――大正デモクラシーと〈土〉の思想』不二出版、一九八五年、一九八～二〇〇頁。

(61) 水上七郎『誓之御柱』奉公会、一九二一年六月（増補第二版）、四三頁。

(62) 無署名「大日本弥栄会の進展」『いやさか』一三号、一九二九年三月、一頁。

(63)「大日本弥栄会役員」『いやさか』一九号、一九三一年一月、一五頁。

(64) 中村正元「皇国運動の実施」『少年団研究』二巻八号、一九二五年八月、四一頁。

(65) 以上、無署名「愛知県知多郡成岩町男女青年団建設の『誓の御柱』」『いやさか』一三号、一九二九年三月、六頁。

(66)『愛知県立半田高等学校誌』愛知県立半田高等学校創立記念事業実行委員会、一九八〇年、一七七～一七九頁。戦後は移転を繰り返している。

(67) 中村正元「知多に於ける誓の御柱除幕式に臨みて」『いやさか』一三号、一九二九年三月、六頁。

(68)「我が校」『知多』一五号、一九二九年一一月、四七～四八頁。

(69)「母校創立二十周年を祝ひて」『知多』一六号、一九三〇年一二月、七二頁。

(70) 瀧本豊之輔『五箇条御誓文大意』東学社、一九三四年、七五頁。

〔付記〕本研究はJSPS科研費JP17K02256の助成を受けたものです。